



TITLE:

イギリスの図書館ネットワーク : 英国図書館・イギリスの大学図書館
訪問記 (1)英国図書館新館 (The
British Library at St Pancras)

AUTHOR(S):

呑海, 沙織

CITATION:

呑海, 沙織. イギリスの図書館ネットワーク : 英国図書館・イギリスの大学図書館訪問記
(1)英国図書館新館 (The British Library at St Pancras). 静脩 1999, 35(3): 4-8

ISSUE DATE:

1999-02

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/37512>

RIGHT:

イギリスの図書館ネットワーク： 英国図書館・イギリスの大学図書館訪問記 ①

英国図書館新館 (The British Library at St Pancras)

工学研究科・工学部電気系図書室 呑 海 沙 織

1. はじめに

私にとって、英国図書館はずっと「不思議な図書館」でした。なぜなら、日に1万4千件以上の世界各国からの文献複写依頼を、脅威的なスピードで処理しているからです。「どうやって処理しているんだろう」と私の中で疑問はふくらむばかりでした。そして4年前、実際に英国図書館文献供給センター (The British Library Document Supply Centre) を見学するためイギリスへ足を運びました。そしてそのときから、英国図書館は、私の中で「不思議な図書館」から「魅力的な図書館」へと変化し、イギリスの図書館へも関心を向けるようになったのでした。

このたび、1998年11月1日より2週間、「平成10年度京都大学後援会助成金第1類第1種 (海外派遣)」の助成により、イギリスへの研修派遣の機会を得ました。大きな期待を胸に、下記の図書館を見学することができました。

- 1) The British Library
 - ① The New Library at St Pancras
 - ② The Science Reference Library
 - ③ Document Supply Centre
- 2) The Institute of Electrical Engineers Library
- 3) Oxford University
 - ① Old Bodleian Library
 - ② New Bodleian Library
 - ③ Radcliffe Camera
 - ④ Radcliffe Science Library
- 4) Cambridge University Library
- 5) Leeds University Library
- 6) UMIST Library
- 7) Imperial College
 - ① Imperial College Library
 - ② Science Museum Library
 - ③ Electrical and Electronic Engineering De-

partment Library

- 8) Birkbeck College Library

2. 目的

イギリスにおける図書館は、長い歴史をもっています。日本では1900年頃、公共図書館が15館しかなかったのに対し、イギリスでは、1910年頃には、ほとんどの市や町が公共図書館をもつようになり、1930年代には、図書館未設置の地域はほとんどなくなっていたといえます。そしてそれらの図書館は、ただ個別に設置されたわけではなく、それから1970年代にかけて、公共図書館の全国システムが構築されたのでした。また、大学と運命をともにする大学図書館も、オックスフォード、ケンブリッジの歴史が中世にさかのぼることからみても、とても古い歴史を持つものであることがわかります。そして、古い歴史を持つ図書館は、古い貴重な資料を所蔵しています。

電子図書館ということばをキーワードに、今、図書館界は、あらゆる意味で過渡期にあります。イギリスでも、英国図書館のDigital Library Programme、大学図書館を中心とするeLib Programmeなどの電子図書館プロジェクトが存在します。このような状況の中、古い歴史を持つイギリスで、新しい技術と古い伝統・資料がどのように融合されているのかを調べるのが第1の目的です。

また、イギリスでは多くのライブラリ・コンソーシアムがあります。ひとつの大学図書館が複数のライブラリ・コンソーシアムに参加していることも珍しいことではありません。電子ジャーナルやオンライン・データベースの導入に伴うあらゆる面でのコスト問題に最も有効であると思われる、このライブラリ・コンソーシアムの実態を知るとというのが第2の目的です。

そして、4 年前に訪れたとき工事中であった英国図書館新館の見学が、イギリス訪問第 3 の目的です。

3 準備

準備はすべて、インターネットを利用しました。情報収集は、Web ページから行い、訪問機関とのやり取りはすべて、電子メールを使いました。

特によく利用した Web ページは、'University of Wolverhampton UK Sensitive Maps' と 'RAIL TRACK' です。'Sensitive Maps' は、イギリスの高等教育・研究機関の地図に各機関の Web ページや情報がリンクされているページですが、各機関間の大雑把な地理関係などの情報をつかむのに、重宝しました。'RAIL TRACK' は、出発駅と目的地を入力すれば、時刻表と所要時間がわかるページで、スケジュールをたてるのにとても便利でした。最寄の宿泊施設なども、いくつかの Web ページで参照することができました。

電子メールも、つくづくその便利さを実感しました。電子メールを出すと、すぐに返事がかえってくることが何度かあったのですが、すぐに応対してくださるという気持ちの暖かさを感じるとともに、電子メールの手段としての速さ・簡便さを心から感じることができました。電子メールの利用には思わぬ副産物もありました。回を重ねるごとに、用件以外にお互いの図書館の様子、趣味や好み、考え方などを少し書き加えるようになったのです。そうして、実際にイギリスでお会いしたときには、なんだかずっと前から知り合いだったような錯覚を感じました。手紙や FAX や電話では、こうはいかなかっただろうと思い、時代の恩恵を感じます。

たくさんの方のお力添えで、多くの図書館を見学し、いろんな方と知り合い、さまざまなことを考えさせられた 2 週間でした。書きたいことはたくさんあるのですが、今回は、英国図書館新館について、報告します。

4 英国図書館の歴史

英国図書館 (The British Library) は、イギ

リスの国立図書館です。1972 年に法律第 54 号として英国図書館法 (The British Library Act) が制定され、1973 年に、大英博物館図書館 (The British Museum Library)、国立中央図書館 (The National Central Library : NCL)、国立書誌局 (The British National Bibliography : BNB)、国立科学技術貸出図書館 (The National Lending Library for Science and Technology : NLLST)、国立科学発明参考図書館 (The National Reference Library for Science and Invention : NRLSI) などがひとつの組織にまとめられ、設立されました。

機構としては、まだ新しい図書館といえますが、その歴史は 18 世紀に設立された大英博物館 (The British Museum) にさかのぼることができます。そして、そのコレクションの源となったのは、10 世紀から積み重ねられてきたイギリス国王の蔵書です。

ちなみに国立図書館とは、国が設立・運営する図書館で、国内の出版物を網羅的に収集し保存する、国民全体を利用対象とする図書館です。日本では、1948 年に設置された国立国会図書館がこれにあたります。

The British Library は、「英国図書館」の他に、「大英図書館」「ブリティッシュ・ライブラリ」「BL (ビー・エル)」などと呼ばれていますが、ここでは「英国図書館」という表現を用います。

5 二つのサイト

英国図書館は、大きく分けて、二つのサイトに分けられます。「ロンドン・サイト」と「ボストン・スパ・サイト」です。ボストン・スパは、ロンドンから電車で 2 時間半のヨークから、さらに車で 20 分のところにあります。都会のロンドンとは対照的な田園地帯です。この二つのサイトに、英国図書館のはっきりした目的意識をうかがうことができます。

ロンドンは、便利な場所である反面、地価や人件費が高いというマイナス面をもっています。そこで、図書館のうち、ロンドンにある必要のないものはすべて、ロンドン以外に移してしまおうということになりました。地価・人件費が安いこと、国土の中央にあり国内であれば 1 日

で郵便物が届くということ、等の理由から、ボストン・スバが選ばれました。

現在、利用者への直接サービスに関わる業務、例えば閲覧・レファレンス等のサービスはロンドンで行い、ロンドンにある必要のない間接的サービス、例えば、文献複写サービスや書誌サービス、コンピュータ・通信関係、データベース構築などの業務は、ボストン・スバで行われています。この、機能分担と地理的分担の見事なまでの融合は、理論的な英国図書館の凜然とした戦略がうかがえます。

さて、「ロンドン・サイト」ですが、組織的に一つであるとはいえ、その歴史的経緯から、長らく地理的・機能的には十数カ所に分散したものでした。資料の劣化などの資料の保存問題、増え続ける資料のスペース問題、資料の分散問題などから、場所として一つにまとまった図書館の必要性は早くから唱えられていました。セント・パンクラスの新図書館用地は、英国図書館が組織として設立されてから、わずか3年後の1976年には購入されていたのです。1982年にやっと新館の建設が始まり、15年の歳月を経て、1997年、他の閲覧室に先駆けてまず、人文科学閲覧室が公開されました。これを初めとして、段階的に移転がなされ、今年（1999年）中ごろにはすべての移転が終了する予定です。なお、1513年に発行された最初のニューズレターを所蔵するロンドン北部のコリンデールにある新聞図書館は、新館に移る予定はありません。

6 新しい英国図書館

昨年（1998年）6月25日にエリザベス女王を



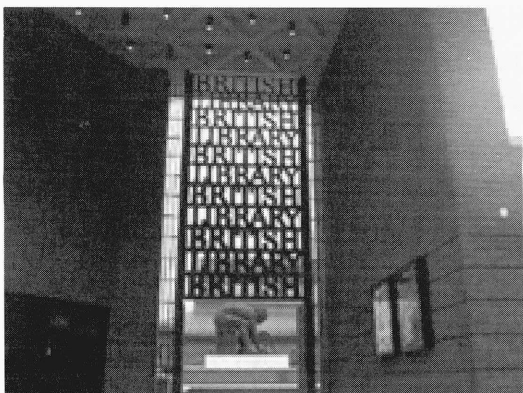
迎えて、英国図書館新館の公式なオープニング・セレモニーが行われました。新館が開館されるまでは、建設に反対する声もあったようですが、開館されてからは、ロンドンの新しいランドマークができたと言われ歓迎する声にかわっていったそうです。最終的には、まだ開室されていない閲覧室があるにもかかわらず、来館者は44%、閲覧許可証の発行は50%増加したということです。ちなみに、新館の真向かいのパブも、新館が開館されてから大繁盛しているということで、実際金曜日の夜は、少し身体を動かすと隣の人にぶつかるくらいのおおにぎわいでした。

ロンドンにはいくつか大きな駅がありますが、そのひとつが、セント・パンクラスです。1867年に建設されたこの駅は、落ち着いた赤いレンガでできた優雅な建物です。この駅に使われたのと同じ素材で作られたレンガが、英国図書館の新館に使われています。

'BRITISH LIBRARY'と、すかしのはいった門をくぐると、落ち着いた赤いレンガの美しい建物が目の前に現れます。これが英国図書館の新館です。図書館の入口を入ると、右正面に受付カウンター、左正面に大きな階段があり、その上に閲覧室に続くエスカレーターが見えます。白を基調とし、自然採光をとりいれた明るい広々としたエントランスです。

建物は、地上8階・地下4階で、11の閲覧室、展示室、会議室、講堂、ブックショップ、レストランなどがあります。特徴的なのは、建物の真中をつらぬくような形でそびえているガラスばりの王立文庫タワーです。この王立文庫は、ジョージ4世によって国家に下賜されたジョージ3世（1760-1820）の蔵書です。11の閲覧室は、3階にわたって配置されていますが、どの閲覧室も、この階を貫いた王立文庫の左右に位置する形になっています。閲覧室を出ると、どの階からも王立文庫が目に入るというような、シンボリックな存在です。

各閲覧室は、落ち着いた深い緑色が基調になっています。天井が高く、空間を意識した広々とした造りになっていて、自然光をとりいれながらも、直接光が入らないような設計になっています。木目を生かした閲覧機の表面と椅子は、



深い緑色のレザー張りです。また、同じレザーが、ドアのノブに巻かれているという凝りようでした。各閲覧席には、情報コンセントがついています。ポータブル・コンピュータの持込が許可されており、インターネットに接続することもできます。何時間でもここにいたいと思わせるような空間でした。

7 リーダーズ・パス（閲覧許可証）

ところで、これらの閲覧室には誰もが入れるわけではありません。セント・パンクラスの新館は、公共のレファレンス図書館ではなく、研究図書館であるためです。その所蔵資料を必要とする研究者あるいは、他の図書館では入手できない資料の利用を希望する者が申請を行い、閲覧許可証（Reader's Pass）が発行されて初めて利用が可能になります。閲覧許可書発行時には、図書館を利用する理由や研究分野について問われます。閲覧許可証の期限は、通常5年です。原則的に、18歳以上の利用者のみに発行されますが、18歳以下でも、妥当な理由があれば短期間の閲覧許可証が発行されます。

特定の利用したい資料がある場合は、まず館内のOPAC（オンライン図書館目録）で調べます。そうすると、その資料がすぐに利用できる状態であるかどうかを知らせてくれます。セント・パンクラス以外に所蔵されている資料も、48時間以内に入手することができます。またその際、この閲覧許可証のナンバーを入力し、次回来館する日付を指定しておくと、そのときに資料が用意されている仕組みになっています。

8 入館料徴収問題

英国図書館による閲覧室利用者への入館料徴収問題は、さまざまな議論の末、1998年9月、当分の間入館料は徴収しない旨の最終決定がなされました。英国図書館は、世界中でもっとも収入をあげている国立図書館で、予算の3割以上を自館の収入でまかっています。にもかかわらず、新館建設に膨大な費用を費やしたため、年2000万ポンド（約40億円）の資金不足に陥っています。このため、コスト削減や収入増加のための方策を考えなければなりません。このコスト削減の一案として、「入館料の徴収」があげられていたのです。これには、強い入館料徴収反対のキャンペーンをはじめ、あちらこちらから、反対の意思表示がなされました。

また、英国図書館自らが、今後5年間の英国図書館に対するアンケートを行ったところ、入館料の徴収に賛成する人はごくわずかであることがわかりました。いまでこそ、図書館が無料で利用できるのは当然だと考えられていますが、はじめから誰もが無料で図書館を利用できていたわけではなく、これは、先人たちが勝ち取ってきたもののなのです。図書館にとって、無料で資料を提供するのは、すべての人に平等に資料を提供するというその役割からも、根本的なものであると思う私は、この「入館料徴収せず」という決定を知って、ほっとしました。今年（1999年）から、欧州連合（EU）15カ国のうち、11カ国で新通貨ユーロが導入されましたが、イギリスは当面不参加を表明しています。2002年の選挙後に国民投票で参加するかどうかの決定をすることになっているようですが、重要な決定には、国民の意思を問う土壌ができあがっているように感じます。

9 国民の理解を求めて

英国図書館新館は、ロンドンの新名所になりつつあります。けれども、なんとなくそうだったわけではありません。ところどころに、英国図書館のマーケティングと広報活動の巧みさ、思考の柔軟性を感じることができました。まず、図書館には三つの常設展示場があり、誰でも無料で入ることができます。ここでは、マグナ・

カルタを初め、「地下の国のアリス」のオリジナル原稿、ビートルズの原稿など、魅力的な資料が展示されています。視覚資料にとどまらず、たくさんの録音資料も公開されています。私はナイチンゲールの声を試聴してきました。ブックショップには、英国図書館に関する図書や英国図書館グッズも販売されています。また、英国図書館の資料をより有効に利用するために、そしてより興味を深めるための市民講座も開かれています。

なかでももっとも興味深かったのが、図書館で行われたダンス・ショーです。'Dance Umbrella' というダンス・グループが図書館という建物を舞台に幻想的なショーを繰り広げました。図書館の廊下、階段、オープン・スペースに、シンプルな衣装をつけたダンサーが、本や新聞を使って踊るのです。ダンスと音楽と白い壁に映し出される画像が不思議な空間を生み

出していました。このショーは、5日間にわたり、図書館閉館後に行われましたが、チケットはあっという間に売り切れたそうです。私をこのショーに招待してくださった図書館員の方の言葉が印象的でした。「わたしはこんなにすばらしい図書館で働くことができて幸せです」。ショーの後、楽しそうに帰って行く人々を見ながら、この人達もきっとだんだん英国図書館の支持者になっていくに違いないと思いました。

この新館の立ち上げには、さまざまな計算ミス、多くの反対、それに伴う工事等の遅滞があったと聞きました。現状から、とりあえず今何ができるかを考えることも大切です。けれども、はじめに明確なビジョンを掲げ、その実現に向かって邁進する英国図書館の姿を、私はとても眩しく感じました。

今回は、イギリスの大学図書館について報告する予定です。 (どんかい さおり)

経済学部図書室紹介

—シリーズ「京都大学図書室巡り」—

経済学部図書室に所蔵する珍しい本、そうです！お宝を紹介しましょう。

その筆頭は、やはり「上野文庫」^{注)}でしょう。

「上野文庫」は、朝日新聞社主であった上野精一氏(1882-1970)が収集された書籍と新聞関係資料から成り立っています。幕末・明治初期の新聞が、経済学部図書室4層の貴重書を納めた書庫の中にあります(図1)。帙に包まれた新聞を取り出してみました。『官板バタヒヤ新聞』・『京都新報』・『官許琵琶湖新聞』などなど。どれも和綴です(図2)。私たちの新聞に対してもっているイメージとは大部違います。

『朝日新聞』の第1号もあります(図3)。“明治12年1月25日(土)”という発行日付です。こちらは、現代の新聞と同じような体裁ですが、大きさは今のより小さいです。

アダム・スミスの『国富論』初版(1776年)2版(1778年)も貴重です(図4)。

4層の貴重書庫の中には、河上文庫として経済学部教授であった河上肇(1879-1946)の旧蔵書もあります。河上の手による書き込みのある図書・自筆ノート・原稿、ここにも経済学部

に長い時間が流れているを感じさせます。1層の一般図書書庫には、地方史誌関係の本が多数あります。日本中を北から南まで、いろいろな地域の史誌類が収集されています。古書店で相当に高価な値段の付いているような本が目白押しです。挿絵や写真図版を眺めていると、不思議な風景、懐かしい情景を見ることが出来ます。

無論、経済学部図書室には最新の経済学関連の書物が多数収集されています。今回は視点を変えた経済学部図書室案内です。書庫の中には残念ながら経済学部教官・大学院生以外には入れません。目録で検索の上、利用したい本をご覧ください。